

# 第1回桃山学院大学図書館書評賞受賞作一覧

## 〔優秀書評賞〕

岡本 いずみ（経済学部1年次生）

ジェニーン・ロス『食べ過ぎることの意味:過食症からの解放:』誠信書房 2000年

松本 祐典（文学部1年次生）

永井 明『病者は語れず:東海大「安楽死」殺人事件:』文芸春秋 1995年

## 〔佳作〕

尾崎 夕夏（経済学部1年次生）

遠藤 周作『海と毒薬』(新潮日本文学:56 遠藤周作集所収) 新潮社 1969年

濱田 紘貴（社会学部3年次生）

湯浅 健二『サッカー監督という仕事』 新潮社 2000年

北村 卓也（文学部1年次生）

鎌田 實『がんばらない』 集英社 2003年

## 〔総合講評〕

書評賞選考委員会代表  
社会学部教授 北川紀男

今年度から学生諸君の図書館利用をより活発にすることと、読解力および表現力の向上を願って図書館書評賞を設けました。今回の第1回書評賞に対して、51名から55作品という多数の応募があり、主催者側としては嬉しく思っています。応募作品は、教職員13名からなる図書館書評賞選考委員会において、第1次から第4次にいたる慎重な審査を経て、優秀書評賞2編、佳作3編を決定しました。残念ながら今回は、最優秀書評賞の該当作品は認められませんでした。次回以降に期待したいと思います。

ところで、今回の書評賞は第1回目であり、応募された方や興味をもたれた方の多くは、先ず「書評ってなに?」「書評ってどう書けばいいの?」という疑問をもたれたのではないのでしょうか。書評と一口に言っても、対象書籍のジャンルによって必ずしも同じではありませんし、また新聞や一般雑誌に掲載される書評であるか学術雑誌の書評であるかによっても異なりますが、ここでは新聞や一般雑誌の書評を念頭において、その要件をいくつかお話しておきたいと思えます。先ず書評は感想文ではなく、①当該書籍の内容の要約または概要が盛り込まれていること、②その書籍の良い点や悪い点が明示され、それに対するコメントが述べられていること、③文章の読みやすさ、表記の適切さ、文章構成の確かさ

が問われます。

①や②が欠落しておれば、書評とは言えず、感想文の域を出ていないと言わざるをえません。③の読みやすさや文章構成の確かさについては一概に言えませんが、今回の応募作品で最も気になったのは、句読点の付け方や段落の設け方など文章作成の基本的なルールが守られていなかったことと、誤字脱字が少なくなかったことです。この点については、われわれの教育の仕方の問題があることを痛感させられ、今後の教育方針に改善の方策を組み入れて努力したいと考えています。

以上の点は、今回の選考基準ともなっているもので、最優秀書評賞がなかったということは、上記の①②③の要件を十全に満たす作品がなかったこととなります。これらの要件が満たされていないければ、書評賞のランクが下げられたり、選外となってしまいます。次回以降の書評賞応募の参考にしてもらえれば幸いです。

なお、最後に是非お伝えしておきたいことがあります。書評賞にかぎりませんが、応募作品は学生諸君自身の言葉によるものでなければなりません。残念ながら、今回の応募作品のなかにも若干認められたのですが、他人の文章を引用の断りもなく用いたり、ウェブ上の書評をコピーして継ぎ張りするようなことは厳に慎まなければならないことです。

私がお話ししました以上の点や、個々の作品の講評のなかで指摘されている点を参考にして、次回以降もより多くの学生諸君が応募してくれ、より素晴らしい書評が出てくることを願って、私の講評を終わります。

## 〔優秀書評賞〕

ジェニー・ロス著

『食べ過ぎることの意味 :過食症からの解放:』

岡本 いずみ(経済学部1年次生)

「『空腹とは恋をしているようなもの』このことがピンとこないとしたら、あなたは過食症ではないのでしょうか。」

私には、悩んだときに開く本がある。その本の冒頭に書かれているのが、この言葉だ。これは過食症のカウンセリングをテーマにした本である。過食症とは、あらゆるストレスや過去のトラウマが原因となり、異常な食欲を見せる摂食障害の一種である。ときには、大量に食事を摂取した後、嘔吐する場合も見られる。特に若い女性に多く見られ、患者自身は過食行動を他者に気付かれる事を嫌うのも特徴である。

私は、過食症患者ではない。けれど、つねに自身の体重の変化や食事、周りからの視線を気にしている。思春期の女性にはごく当然のことかもしれない。「アイスクリームはカロリーが高いからよそう」「夜9時以降、何も口に入れては駄目」

このように、ありとあらゆるダイエット方法が私たちを取り巻いている。特に過食症患者にとってそれらの情報は彼女達を「痩せなければ」という強迫観念で縛る縄といっても過言ではない。

本著者ジェニー・ロスは過食症患者が過食する原因を、体重の増加を恐れるあまり食べたいものを我慢し続ける一方でしばしば欲望を抑えていたボルトがはじけてしまうことにある、としている。そして、患者を過食症から解放するには「自分の食べたいものを、味わって食べる」としている。著者は、自身が過食症だった時期にチョコチップクッキーを2週間に渡って食べ続けたエピソードを紹介し、いかに自身の欲望に従順になるかを示している。

女性の中には、ダイエットの最中に、本来食べるべきではないであろう生クリームたっぷりの甘いケーキを我慢しきれずに食べてしまった、という経験をした人は、少なくないのではないだろうか。そして、みじめな後悔を噛みしめたのではないだろうか。

「本当に満たされるためには、自分が何を食べたいのか気付くこと。また、本当は何がしたいのか気付くこと。望んだ物すべてが、満たされるわけではないにせよ。」

その主張は、私たちの生き方にも一石を投じる。人生において、本当にしたい事を望むのは苦しい。本当に欲しいものと、自分の居る場所の距離に愕然とする

こともあるだろう。本当に望むことを避けて、より手に入れやすいことに向かってしまうかもしれない。これは、私たち大学生が進路を考える時にオーバーラップさせられる。

私たちが本当にしたいこと、欲しい物を見て見ぬふりした時、行き着くのは苦しみでしかない。苦しむならば、本当にしたいこと、欲しい物を叶えるために苦しむべきだ。私たちはいつでも、自分の欲望の先に恋している。自分の欲望から目をそらすべきでない、そう教えてくれた本だ。

## 〔優秀書評賞〕

永井 明著

『病者は語れず:東海大「安楽死」殺人事件:』

松本 祐典(文学部1年次生)

東海大「安楽死」死事件は、今から15年前の1991年に起きた。簡単に事件内容を紹介しよう。東海大内科に、血液ガン的一种である「多発性骨髄腫」で入院中の石渡省一さん(仮名)に対して、患者の長男である孝さん(仮名)の「延命を中止してほしい、父は苦しんでいる」という強い要望があり、徳永雅仁医師(内科助手)が塩化カリウムを注射し、その結果、患者死亡で殺人罪(判決は有罪)に問われたという経緯だ。

本書には、元医師であり現在は医療ジャーナリストである永井明氏が実際に法廷に出向き、そこで得られた証言や有識者の見解、自らの調査結果および永井氏本人の意見が書かれている。

本書の構成は、読者の知的興味をそそり、且つ理解を深めるために、プロローグでは、ノンフィクションとしてはやや冒険的に病院内での事件が起こるまでの出来事と各々の立場(医師、患者、家族)における心理を事細かに描いている。そして、第一章から順に裁判における時間経過、展開(弁護側と検察の対立など)が詳しくわかりやすく記されている。

本書を読むに当たって、高度な医療知識や裁判の知識が要求されているわけではない。読み進めていくと、大学病院における旧態依然の医師を頂点としたヒエラルヒー(ヒエラルヒーとはピラミッド型の厳しい階級制度の意)、医局講座制ヒエラルヒー、被告の権威主義体質、患者の長男の独善主義、封建制度的家長の考え方などが複雑に絡み合った結果として事件が起こってしまった悪夢が浮き彫りになってくる。

多くの人々や評論家は、この事件の原因は「東海大のチーム医療が機能しておらず、被告が誰とも相談す

ることなしに単独で判断、実行（犯行に及んだ）した」ことにあると見なしている。しかし、元医師である著者をはじめ多くの現役医師たちは「大学病院システムについて議論するなら、『医局講座制』をこそ問題にすべきであり、言葉だけの『チーム医療』や医局講座制が前提の『教授に相談する』システムについて検討しても意味がない」という見方をしている。

また、本件の裁判における最大の論点は「患者に代わって家族が安楽死の意思表示ができるかどうか」であり、本書には、弁護側、検察側、被告、著者、有識者、現役医師各々の立場における見解や諸外国の見解がわかりやすく端的に紹介されている。みなさんの中には「15年も前の真実を知ったところで自分の人生には関係がない」と考える方もいらっしゃるに違いない。しかし、日進月歩の医療は確実に安楽死や尊厳死といった新たな問題を生み出すということをよく考えて頂きたい。そういった新たな死を考えるためにも本書を是非手に取って頂きたい。加えて、本書を読むと日本の医局制度ヒエラルヒーから生じる問題点が見えるし、どのように法廷で審理が行われているかということも自ずとわかってくる。

15年前の裁判の判例では、安楽死の意思表示は家族が代行できないとしているが、現在ではどうあるべきなのか。本当に、医局講座制ヒエラルヒーを維持していいのか。我々は、そのことを真剣に考えなければならない渦中におかれているのだ。

## 【佳 作】

遠藤 周作著

『海と毒薬』(新潮日本文学;56 遠藤周作集所収)

尾崎 夕夏(経済学部1年次生)

戦時下、夜ごと空襲があり、いつしか何処が焼けようが、人々が死のうが死ぬまいが誰も気にしなくなってしまった。

本書は、この異常な時代の大学病院を舞台にして“罪責意識を問う”というテーマをもって展開されていく。

“罪責意識”の感じ方は、人それぞれに違いがある。自分の良心に反することをしてしまい、激しく思い悩むヒューマニスティックな人もいれば、本人ですら自分を不気味に思うくらい良心が麻痺してしまっている人もいるのだ。

この作品は、様々な事柄を通して様々な人間の心情を照らし合わせるように描かれている。

作中、多くの登場人物がいるが、実質的な主人公である医局生の勝呂に注目してもらいたい。田舎出身の勝呂は医者として成功の道を歩む教授の人生に憧れを抱きつつも、何より普通が一番なのだという考えを持つ。

また彼は、医局部内の複雑な内情に疎く、自ら進んで知らずともしない。将来は山の療養所で結核医として働こうと思っている彼には関係のないことなのである。

それゆえ彼は、医局内の中では浮いた存在である。

しかし、それは彼が異常なわけではなく、周りが異常なのだ。勝呂という人物は、異常な状態の中で唯一、正常に近い心を持つ人物なのである。しかし、その正常な心は、次第に周囲の“異常”に飲み込まれていくのである。

どのようにして、勝呂の正常な心は触まれていくのだろうか。

病院という場所は本来、患者の治療を目的とする施設である。しかし、舞台となっている病院はこの目的からずれている。病院の患者たちは、時には実験台であり、時には医者のお世の道具なのである。

このような環境に置かれた勝呂は非常に思い悩む。

そんな彼をさらに悩ませることとなるのは、同じ医局生の戸田である。

戸田は開業医の息子として生まれ、恵まれた環境で育ったが、その環境のせいかわ彼の良心は麻痺していた。

彼は、どんな非人道的なことがあっても、また、そのような罪を犯してしまっても苦しむことはなく、唯一彼を恐怖に陥れるものは“社会の非難”ただ一つだけである。

それが例え、生体解剖という悲惨な事件であったとしてもだ。

この作品の中で起きる最も大きな事件はアメリカ人捕虜の生体解剖である。

勝呂以外の人物は、軍人も含め大きな呵責に苛まれることもなく、逆に彼らは好奇心旺盛な子供のようにであった。

しかし、勝呂はというと解剖実験のあいだ壁にもたれかかり、必死に現実逃避に走っていた。

一方、戸田は実験の様子を一つでも見逃すまいとして見つめる将校たちを馬鹿だと心の中で呟きながら、この実験が自分に自責の念を与えてくれるのではないかと期待していた。

しかし、彼にもたらされたのは、幻滅とけだるさだけであった。この事件は後に世間に知られることとなり、関係者は処分される。もちろん助手として参加していた勝呂と戸田も例外ではなく、この二人は2年間、服役することとなる。

この事件が勝呂の人生を大きく変えたのはいうまでもないが、彼は一生涯、罪責意識を感じながら生きていかなければならないのである。

そして戸田に関しては、人生で初めて自分が犯した罪が社会の批判を受けることとなる。

この生体解剖という名の殺人は、多くの人々の人生を変えてしまった。しかし、彼らにはこの忌まわしい事件を阻止できる機会があったのである。

にもかかわらず、実験に踏み切った彼らを通して、著者は読

者に罰を恐れながら罪を恐れない日本人の習性がどこに由来しているのかを問いただしたかったのではないだろうか。

### 〔佳 作〕

湯浅 健二著 『サッカー監督という仕事』

濱田 紘貴(社会学部3年次生)

本書はサッカーの監督というものがいかなる仕事であるかを記した本である。またその仕事をするためにはどのような資質を持ち合わせていなければならないのか、何よりも教えないといけないのは何なのか、という仕事の本質部分の解説からスタートする。次に実践的な部分としては、攻撃と守備にどのようなエッセンスを加えていくのか、心理マネジメントはいかようにするのか、どのようなメンタリティーが必要で、才能豊かなスター選手に対してどういった態度で臨んでいけばよいか、試合でしなければならないことは何かなどを、サッカーの本場ドイツで指導者のプロライセンスを取得し現在はマーケティング会社も経営するという二つのリーダーの顔を持つ著者の経験や、世界の名将といわれる監督の様々なチームマネジメントの例を交えながら紹介し推奨する内容となっている。

まさにこの本は、現在サッカーを教えている指導者やこれからサッカーの監督を目指す人、リーダーとしての資質を育てたい人のための参考書となるものであると思う。

本書の中で、著者が特に強調していたフレーズは「パーソナリティ」という言葉である。この言葉の一般的な意味は「個性・人格」とされているが、ここでは「選手達を、チーム共通の目的・目標達成へ向けて最大限の力を発揮させることができる、個性的な能力や人間的魅力」とされている。これはリーダーとしてふるまわなければならない人には必ず必要なものであり、これぞサッカー監督の真髄といえる内容が名監督の事例とともに記されていた。このパーソナリティという言葉の内容を理解出来ればサッカーの指導者という仕事に興味を持てるし、部下をマネジメントするために必要ものはこのパーソナリティということが解る内容となっている。

しかし少し残念な所は、一番指導を必要とする18歳位までのユース年代の育成やマネジメントなどについての論評があまり述べられていないところだ。またサッカーの監督の仕事の紹介本であるため、サッカーの専門用語が沢山出てくるのでサッカーの知識のない人には少し読みにくいかもしれないが、全体としてはサッカー監督のおもしろさをしっかりと伝えている内容になっている。

### 〔佳 作〕

鎌田 實著 『がんばらない』

北村 卓也(文学部1年次生)

「がんばらない」の作者である鎌田實氏は諏訪中央病院にて、地域医療に携わっている。この本は、彼の実体験や身の周りで起こった事柄について書かれている。医療の仕事は生を支えると同時に、死をどのように支えるかということである。医学の手の届かない病でも、患者や患者の家族は、死の恐怖と痛みと苦しみと闘っている。したがって、医療をする側の人は、患者に本当のことを伝え、支えてあげなければならない。まずは患者のことをよく考えて、患者の意思を尊重しなければならない。大事なことは医療者が自己満足するのではなく、患者がその人らしく生きやすいように、生きたいようにさせてあげることである。このような理由から在宅ケアが始まったのである。この本の「がんばらない」とは、医療スタッフが頑張るので、患者はありのままでもいい、という意味である。「がんばらない」と書くことで頑張っている患者の気持ちを落ち着かせて、勇気を与えてくれている。

自分がこの本を読んでいて、一番興味を持ったことは自分の命のあり方を自分で決めることの大切さである。おそらく、多くの人々は長く生きることを望んでいる。そのために医療者がいて、患者のための病院がある。しかし大事なことは寿命の長さだけではない。それよりも死に直面して、あと少ししか生きられない状況に立たされたとき、自分の人生をいかに自分らしく生きるかが大事である。実際、死に直面したとき残りの自分の人生を自分で決めることができない人々も沢山いる。それは死を受け入れるのに時間がかかるからである。そのような中で、自分らしく生きるためには、もちろん心を支えてくれる人が必要である。昔と比べてみても、今の日本人の平均寿命が延びたのは事実である。しかし、死は永遠に回避することはできず、誰にでも必ず訪れる。その死が訪れる時期は人それぞれ異なり、早い人もいれば遅い人もいる。それは考えるまでもなく、とても不平等である。

死に直面した人間には、四つの痛みがあるという。それは肉体的痛み・社会的痛み・精神的痛み・霊的痛みの四つである。その中で、最もケアすることが難しいのは、霊的な痛みである。なぜなら、霊的な痛みは日本人にとって理解するのが難しいといわれているからである。霊的痛みとは、死に直面して生きる意味や価値を考えたときに生じる痛みである。この霊的な痛みを和らげることができれば、死に直面した人も少しは楽になる。これはとても重要なことである。話を聞いてあげて、患者の意思を尊重してあげることができる。あと少しで死んでしまうかもしれない人には、そのことを否定してはいけない。誰と何をしたいか、誰に感謝したいかを聞いてあげるべきである。私たち人間はいつか必ず死ぬ。だから、私たちは今から死の準備をしなければならない。